2015年5月AJCC研究会

研究報告

「栗林写真機製作所の乾板カメラ(間違いだらけの文献、資料を正す)」

会員番号0790　小林昭夫

1. 前書き

栗林写真機製作所(後のペトリ)は、皆川カメラ店などを通して大正末期から昭和10年頃にかけて、曾根春翠堂(発売元)や鳩嶺堂(発売元)などとともに、早くから意欲的に大型一眼レフや乾板カメラを製品化してきた会社である。しかしながら戦前の日本製乾板カメラは、小西六を除くと生産台数が少ないせいか実物を見る機会が極めて少なく、栗林写真機製作所の乾板カメラも、戦後の日本文献では簡単な紹介はあるものの、個々のものについて詳しく紹介されたことがない。一方驚くべきことだが、J. R. Baird氏がCollectors Guide to Kuribayashi-Petri Camerasという詳しい本を1991年に発行している。今回カメラを紹介するに当たり、これら文献に述べられている内容を詳しく検証してみた。その結果実に多くの間違いのあることがわかり、以下にそれらを正していくことにする。

2. 栗林写真機製作所(以下栗林と書く)の歴史

創業は明治40年で、メーカーとしては浅沼商会、小西本店、服部商店に次ぐ歴史を持っている。表1に示すように会社名は何度も変わっているので、ここでは乾板カメラを販売していた時代のものを使うことにした。以下年代やカメラ名など誤りと思われる記述にアンダーラインをつける。

スピードレフレックスは栗林最初のカメラで木製の大型一眼レフ、ミクニカメラは栗林最初のハンドカメラ(ベースボード型フォールディング式乾板カメラが正しいが、ここでは簡略化するため通称のハンドカメラを使う)、ファーストロールカメラは最初のロールフィルムカメラでベースボード型、セミファーストはセミミノルタと並ぶ日本最初のセミ判スプリングカメラ、ファーストシックスは日本最初期の6×6cm判スプリングカメラである。これらカメラの発売年は今回の調査による。戦後は35mm機を中心に社業は発展したが間もなく経営不振になり、激しい労働争議を経て昭和52年に倒産した。会社は組合が管理することとなったが、うまくいかずカメラはまもなく撤退した。しかしこの会社は現在も存続している。

3. 栗林の乾板カメラ

栗林の乾板カメラを表2に示す。スピードベビーレフレックスはそれまで手札判と名刺判のみだったスピードレフレックスに、昭和2年にアトム判(4×6.5cm)を加えた時の名称である。後に全てスピードレフレックス名となった。ファーストカメラは、ミクニカメラが高級型だったため木製の廉価版として発売したものである。後に改良されてアルミ合金製となる。スペシャルファーストカメラはそれをさらに改良したもので、二段伸ばしとレンズの上下左右シフトが可能な栗林のハンドカメラ中最高機種である。コッカ(国華)カメラは栗林で最後に発売されたハンドカメラで、全鉄板のボディをもつ堅牢なカメラである。ファーストエツイは名前が示すように、ドイツ、カメラヴェルクシュテーテンのパテントエチュイをコピーしたものである。トキワカメラは栗林が常盤光学にOEM品として製作したハンドカメラで、筆者も1台所有しているが詳細は未調査である。その他ロマックスカメラというのがあるという説があるが、今回の調査では分からなかった。

ここではこれらのうちスピードレフレックス、ミクニカメラ、ファーストカメラ、スペシャルファーストカメラ、コッカカメラについて紹介する。

4. スピードレフレックス

写真1に矢澤征一郎会員所有で昭和3年に発売された改良型の手札判(9×12cm)を示す。全体形状はイギリスのソーントン・ピッカードの大型一眼レフに似たデザインをしている。シャッターはセルフキャッピング形式で1/15～1/1000秒のフォーカルプレーン式、ホルダーは縦横どちらも装着可能、蛇腹は二段伸ばし、レンズは多種類の外国製が用意された。本個体のレンズには国内では珍しいカール・ツァイス製ウナー135mm F4.7が付いている。全体的に完成度の高いカメラである。このカメラの戦後の文献を調べた結果を以下に示す。最も基本になるべきものは、1971年に日本写真機工業会が発行した「戦後日本カメラ発展史」の中にあるペトリが自社の歴史を書いたものである。そこには次のように書かれている。

「～大正8年木製手札判の「スピードフレックス」を発表、当時東京上野で催された平和博覧会で最高賞を獲得～」

まず間違いと思うのがスピードフレックスという記述である。戦後に多く発売されたほとんどの二眼レフが「～フレックス」という名前を使っていたので、安易にこの名前を使ったと思われる。このペトリの記述を確かめるため戦前のカメラ雑誌の広告を調べてみた。

戦前の本格的なカメラ雑誌は大正10年に創刊された「カメラ」が最初で、当初は撮影方法、現像、焼き付け方などを中心にした小さなものだったが、大正11年に経営が変わって大判になるとともに、内容も現代に近い総合

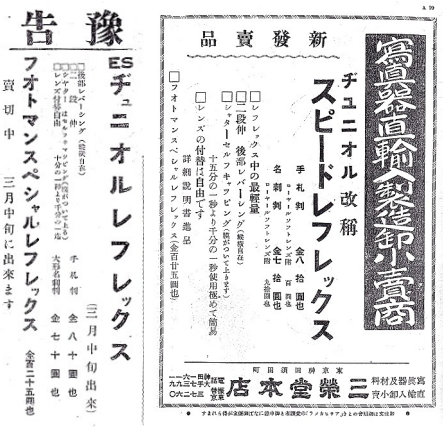
表1.栗林写真機製作所の歴史

明治40	(1907)年	栗林製作所創業　従業員20名 写真やカメラ用品の販売、カメラの修理
大正 6	(1917)年	(合)栗林写真機製作所と改称
15	(1926)年	スピードレフレックスを発売
昭和 3	(1928)年	ミクニカメラを発売
8	(1933)年	ファーストロールカメラを発売
10	(1935)年	セミファーストを発売
12	(1937)年	ファーストシックスを発売
24	(1949)年	(株)栗林写真機械製作所と改称
31	(1956)年	栗林写真工業株式会社と改称
37	(1962)年	ペトリカメラ株式会社と改称
42	(1967)年	経常利益3億3千万円　従業員2000名
46	(1971)年	赤字に転落
52	(1977)年	倒産、組合が工場を運営
55	(1980)年	ペトリ工業株式会社発足(組合の会社) まもなくカメラ撤退

表2　栗林写真機製作所の乾板カメラ

1. スピードレフレックス	大正15 (1926)年
2. スピードベビーレフレックス	昭和 2 (1927)年
3. ミクニカメラ(ハンドカメラ)	昭和 3 (1928)年
4. ファーストカメラ(同上)	昭和 4 (1929)年
同金属ボディ	昭和 7 (1932)年
5. スペシャルファーストカメラ	昭和 9 (1934)年
6. コッカカメラ(ハンドカメラ)	昭和 8 (1933)年
同改良型	昭和 9 (1934)年
7. ファーストエツィ	昭和 9 (1934)年
8. トキワカメラ(常盤光学へのOEM品)	昭和 6 年？

写真 1　スピードレフレックス手札判
昭和3年型（矢澤征一郎会員所有）



（左）図 1 チュニオルレフレックスの発売予告
（カメラ大正15年3月）
（右）図 2 スピードレフレックス新発売の広告
（アサヒカメラ大正15年5月）

的なものになり、各社の広告も載るようになった。スピードレフレックスを後に売り出す三栄堂本店は「カメラ」大正11(1922)年11月号から大正15(1926)年1月号までに11回広告を出しているが、スピードレフレックスに関するものは全く見られない。もちろん他社の広告にもない。前述の平和博覧会は大正11年に開かれているので、もしもペトリの記述が正しいのならば大正11年の広告に大きく出ていると思うのだが、それもなかった。

その後大正15年3月号に図1に示すチュニオルレフレックスの発売予告が三栄堂本店から出、創刊されたばかりのアサヒカメラ大正15年4月号に新発売としてそれが広告され、更にその5月号に改名したスピードレフレックスの広告が図2のように出された。すなわちここで初めてスピードレフレックスというカメラが登場することになる。それ以後前述のアトム判も含め、何度も広告が出た。図3は昭和3(1928)年9月の広告である。写真1はこのカメラにあたる。この中に大礼記念国産振興東京博覧会で第一位優良国産賞を受領したと書かれている。この時の大礼は昭和3年に行われた昭和天皇の即位式を意味し、それを記念して大規模な国産振興東京博覧会が開かれている。この広告の中には図4のような説明がある。スピードレフレックスは3年前(大正15)に発売されたもので、改良したものがこの賞を獲得した、という内容が書かれている。

平和博覧会に関する資料は関西の図書館に各種のもののあることがわかったが、審査を行ったことを示すものは見つけられなかった。一方大礼記念国産振興東京博覧会は国会図書館に多くの資料があり、その中に昭和4年に発行された「大礼記念国産振興東京博覧会審査記録」という本のあることがわかった。その中の第4部機械工業に第54類光学機、写真機部門というところがあり、外国製に対してまだ劣る、という主旨が書かれた後に以下のような文がある。

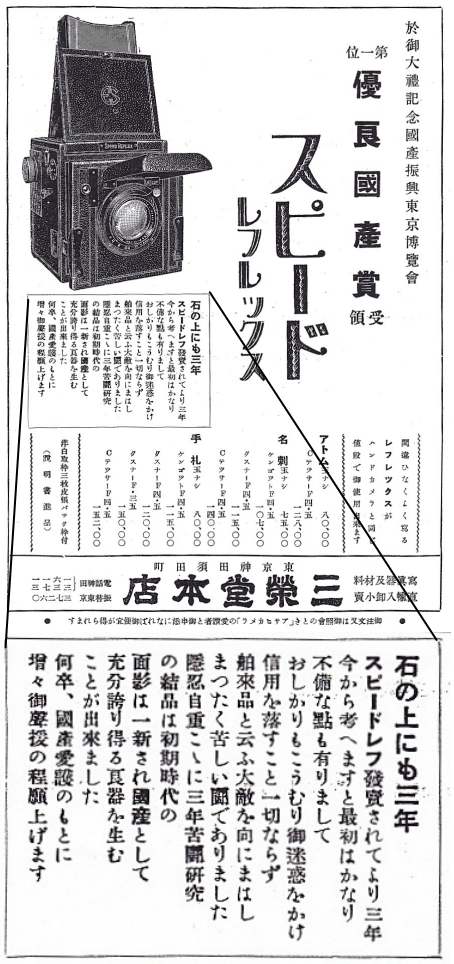
「～今回の出品中小西六本店の小型カメラ二川栄介及宮崎順出品の手提暗函等は相当苦心の跡が見えて実用品として推奨するに足るものがある。」

その後に受賞目録があり、この部門で出品人員44人(会社も含む)出品数371と書かれており、写真機関係の受賞者は次の様になっている。

優良国産賞	写真カメラ各種	小西六
	写真引伸機械	浅沼商会
	写真暗箱	三栄堂本店

スピードレフレックスが出品されたかどうかは不明だが、これから見て出品されたことは間違いないものと思われる。この賞は個々のものでなく会社に与えられたものであり、最高賞とか第一位というものはない。

これらの調査結果から発売は大正8年でなく大正15年であり、賞を受けたのは平和博覧会でなく昭和3年の大礼記念国産振興東京博覧会であったことが明らかである。ペトリの書いた記事はひどい誤りである。



（上）図 3 スピードレフレックス受賞の広告
（アサヒカメラ昭和3年9月）
（下）図 4 図3の中の説明文

この結果をもとに他の文献を調べてみた。1985年発行の国産カメラ図鑑には2台のスピードレフレックスが1919(大正8)年発売と書かれている。これも間違いである。1989年に日本カメラ博物館から発行された「日本のカメラ・誕生から今日まで」の中に「～大正8年「スピードレフレックス」を製作した栗林～」という記述がある。これはペトリの間違った記述をそのまま写したものと思われ、カメラ名も間違ったままである。J. R. Baird氏の本には発売年も含め前述のペトリの書いた内容がそのまま書

写真 2　ミクニカメラ：昭和 5年型

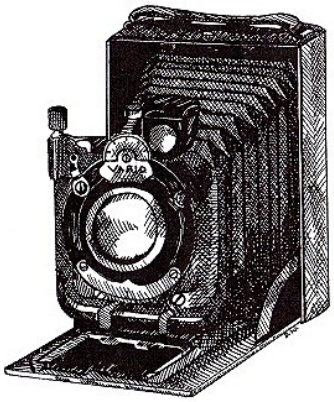


図 5　ミクニカメラの推定図（J. R. Baird、1991）

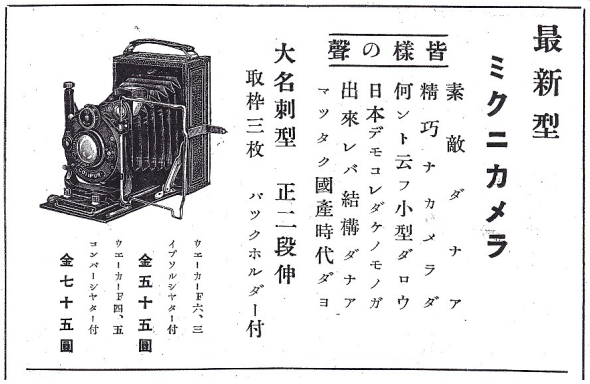


図 6 ミクニカメラ最初の広告
（アサヒカメラ昭和3年8月）

かれている。ただしカメラ名はスピードレフレックスと直されている。この本の中にアサヒカメラの広告が載っており、1925年9月(H.Naoi Collection)と書かれているが、これは1926年の間違いである。

スピードレフレックスは今まで大正8年の発売と考えられ、その完成度の高さから日本カメラ史上価値の高いものと考えられてきたが、大正15年だとすると、それより前に曾根春翠堂から大名刺判のコンペックスレフレックスカメラ、鳩嶺堂からも大正15年に名刺判のシンプレックスレフレックスカメラという木製一眼レフが発売されているので、その位置づけを考え直す必要がある。いずれにしてもペトリの書いたいい加減な記事がこのような事態を招いたものであろう。

5. ミクニカメラ

写真2にミクニカメラを示す。全アルミニューム合金製ボディをもち、2段伸ばし、レンズの上下シフトが可能で、レンズにはドイツ製が用意された高級機である。昭和3(1928)年に発売されたが、写真のものは昭和5年に発売された新コンパー付きで、レンズはドイツ製アミーゴスティグマート105mm F4.5である。画面サイズは大名刺判の6.5×9cmで、以後の栗林から発売されたハンドカメラは全てこのサイズとなる。

このカメラは戦後の文献では写真で紹介されたことがなく、現存するものが極めて少ないと思われる。それらしい絵があるのは前述のJ. R. Baird氏の本で図5にそれを示す。この本にはMikuni Hand Camera c1926と書かれ、One of Japan's leading collectors と会って現物の無いことを知り、中身について聞いたことが書かれており、この絵が示されている。また木製ボディだとも書かれている。写真2と比べるとワイアフレームファインダーはないし、ストラットの形状も異なり、2段伸ばし用のラックアンドピニオン機構もない。この絵はそのまま2005-2006のMackeown's Camerasに乗っており、何とも残念な絵だ。

これも戦前の広告を調べてみた。図6は昭和3(1928)年8月の三栄堂本店の広告で、最新型ミクニカメラと書かれている。図7は昭和4(1929)年4月の皆川カメラ店の広告で、ミクニカメラが大礼記念国産振興東京博覧会で最高賞優良国産賞を受賞したことが書かれている。また全金属ニューム合金製とも書かれている。ミクニカメラの発売元は優良国産賞を受けた三栄堂本店から皆川カメラ店に移っている。

図8は昭和5(1930)年8月の皆川カメラ店の広告で、写真2と同じ新コンパー付きのミクニカメラが出ている。当時セルフタイマー付きの新コンパーはオートコンパーと呼ばれたらしい。その他ミクニカメラの広告は何度も出されており、もっと鮮明な絵もある。従ってJ. R. Baird氏もカメラは無くとも戦前の文献を探すことができていればこのようなひどい絵にならず、木製ともいわずに済んだと思われる。One of Japan's leading collectors がなぜそのことを勧めるとか自分で調べなかったのか不可解である。これらの調査結果から名前はミクニハンドカメラでなくミクニカメラ、発売年は大正15(1926)年頃でなく昭和3(1928)年、ボディは木製ではなく総アルミニューム合金製である。

6. ファーストカメラと
スペシャルファーストカメラ

写真3にファーストカメラを示す。このモデルは昭和7(1932)年にアルミニュームボディに改良された型で、小2段伸ばし、レンズはオプティナー105mm F4.5、シャッターはコンドルシャッターである。レンズシフトはできない。

最初の発売は図9に示すように昭和4(1929)年で、昭和4年に発行された写真機全集に載っている図10や図11が示すように廉価型をねらった木製ボディのカメラである。一段伸ばしでワイアフレームファイダーの無いものと有るものがあった。図11には「～廉価なること驚くばかりなり」と書かれている。写真機全集にはミクニカメラ(テッサー付き)105円に対してファースト一号カメラ34円と出ている。その後何度もこのカメラの広告が出、次第に高級化していく。昭和7(1932)年7月には図12の広告が出た。右下に初めて金属ボディのファーストカメラ(小二段伸ばし)がでてくる。その後ファーストカメラの広告はこの金属ボディになるが、新という言葉は使わず、昭和8年2月と3月にだけそれを使っている。後に説明するコッカカメラも同じだが新であるにもかかわらず2月号では小二段伸ばし、3月号では正二段伸ばしの新ファーストカメラという表現になる。あいまいで意図が不明だがこれより後の広告は二段伸ばしになった。本来ボディが金属製になったものを「新」というべきなので、一般的に「新」をつけるならば昭和7年ということになる。すなわち発売年は次のようになる。

ファーストカメラ(木製)　昭和4(1929)年
ファーストカメラ(金属)小二段伸ばし
昭和7(1932)年
ファーストカメラ(金属)二段伸ばし
昭和8(1933)年

国産カメラ図鑑を見るとファーストハンドカメラとして3台が紹介されている。いずれもハンドという間違った呼び方をしている。1台(1041番)は木製の1929年発売のカメラで問題はない。次の1台(1042番)はラックアンドピニオン式でなくウオームギアがついておりファーストカメラではない。他の1台(1043番)は二段伸ばし機と思われ1933年発売で問題はないが

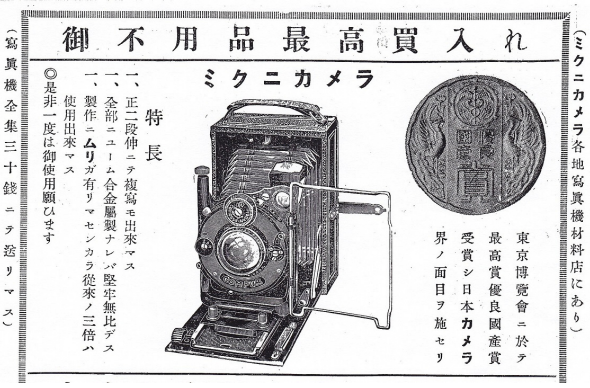


図 7 ミクニカメラ受賞の広告(アサヒカメラ昭和4年4月)

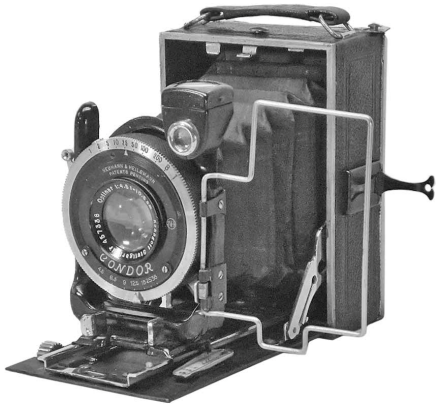


写真 3 ファーストカメラ:昭和7年

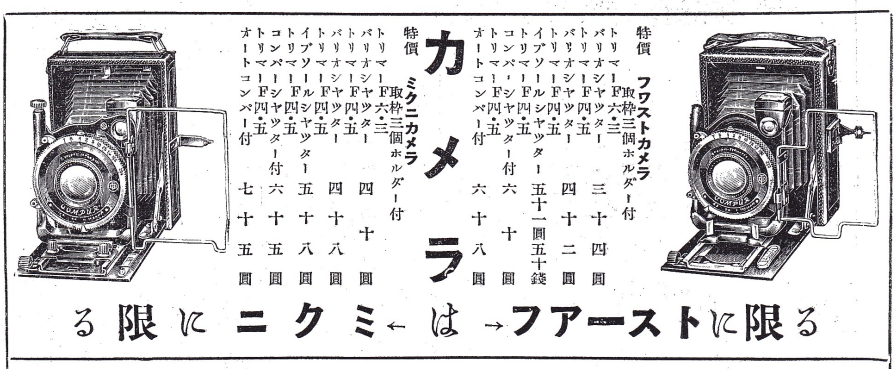


図 8 新コンパー付きミクニカメラの広告(アサヒカメラ昭和5年8月)

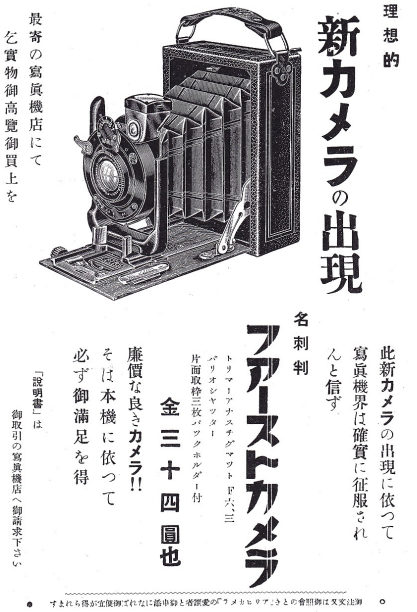
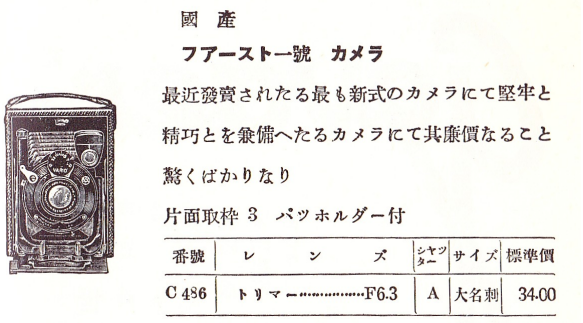


図 9 ファーストカメラ最初の広告
(アサヒカメラ昭和4年3月)

図 10ファーストカメラの広告
（写真機全集、昭和4年）



國　産

フアースト一號　カメラ

最近發賣されたる最も新式のカメラにて堅牢と精巧とを兼備へたるカメラにて其廉價なること驚くばかりなり

片面取枠 3　バッホルダー付

番號	レンズ	シャッター	サイズ	標準價
C 486	トリマー……F6.3	A	大名刺	34.00

図 11ファーストカメラの記事（写真機全集、昭和4年）

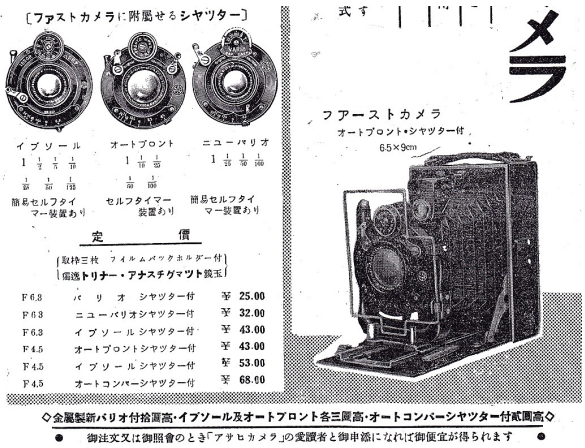


図 12→
金属ボディのファーストカメラ
最初の広告
（アサヒカメラ昭和7年7月）

厳密にいうとワイアフレームの形状から1935年頃の製品と思われる。J. R. Baird氏の本ではFast Hand Cameraとして2台が紹介されている。カメラ図鑑と同様にHandという間違った表現をしている。1台は1929-1932年の木製ボディモデル、もう1台は1932-1936年の新型モデルと書かれており、年代は間違っていない。ただしここに写真として出されたものもワイアフレーム形状から国産カメラ図鑑と同様に1935年頃の製品である。

日本カメラ博物館が2008年に発行した「今はなき昭和のカメラ」には1929年製の木製ボディのものが出ているが、ここでもファーストハンドカメラという間違った名前になっている。戦後の文献に全てハンドという間違った言葉がついているのは、国産カメラ図鑑から来ているのであろう。

写真4に昭和9(1934)年に発売されたスペシャルファーストカメラを示す。昭和8年型のファーストカメラに上下左右へのレンズシフト機構を追加したもので、二段伸ばしかつ水準器が付き、栗林で最高機能をもったハンドカメラである。左右へのレンズシフトにはスクリュー式の機構を使っており、ドイツ製と比べて遜色ない。本個体にはローデンシュトックのトリナー105mm F4.5とプロンターのシャッターが付いている。

スペシャルファーストカメラの最初の広告は、図13に示すように昭和9(1934)年3月に出され、以後何度も掲載された。しかし戦後の文献には全く見つけることができなかった。国産カメラ図鑑にもJ. R. Baird氏の本にもない。ミクニカメラと同様に現存するものが極めて少ないと思われる。

7. コッカカメラ

写真5と写真6にシャッターとレンズ違いのコッカカメラを示す。どちらも昭和9(1934)年型で2段伸ばし、上下のレンズシフト機能および水準器がつけられた最終型である。写真5のレンズは東京光学のステートアナスティグマット105mm F4.5、シャッターは精巧舎のマグナがつけられている。一方写真6のレンズはラディオナー105mm F4.5、シャッターはルーレックスでどちらもノイマンアンドハイレマン製である。このカメラの特徴はボディが鉄板の板金で作られていることで精巧にかつ堅牢に作られている。またピント調整にはラックアンドピニオンでなくウオームギアが使われている。

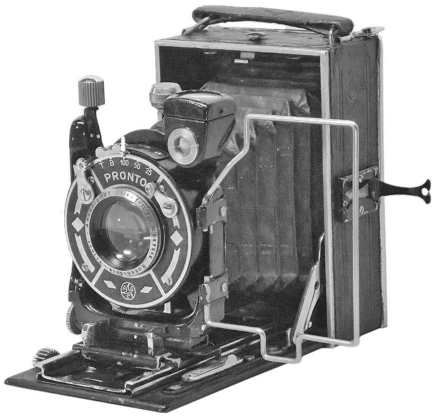


写真 4　スペシャルファーストカメラ：昭和9年

コッカカメラが広告に登場するのは昭和8(1933)年1月からである。この時は新という言葉を使っていなかったが、次の2月と3月にファーストカメラと同様に「新」という言葉をつけている。また2月号までは小二段伸ばしと書かれていたが3月号からは図14のように正二段伸ばしとなる。最初の広告からわずか2か月の違いなので小二段伸ばし機があったのかは疑問である。原稿のミスかもしれない。その後昭和9(1934)年10月に図15に示すようなワイアフレーム形状が真四角になり、レンズの上下シフトのできるコッカカメラが広告され、以後このタイプの広告が続いた。写真5と6はこのタイプである。コッカは国華の字があてられていることが多いが、これら広告においては全くその字はなかった。以上から発売年は次のようになる。

コッカカメラ	昭和8(1933)年
コッカカメラ改造型	昭和9(1934)年

このカメラの載っている文献は少ない。国産カメラ図鑑では2台の写真があるが1台(1077番)は写真5と同じもので正しくKokka Cameraと書かれている。1933年と書かれているが厳密には1934年モデルである。他の1台(1185番)はMinolta Camerasの項に入っていて1985年初版ではHappy Hand Camera、1995年改訂版ではKokka Hand Camera、どちらも1931、製造もMolta Co.と書かれている。これはコッカカメラ1933年型であり、Happyや1931、Hand、Minolta Cameras、Molta Co.というのは間違いである。J. R. Baird氏の本にはKokka Hand Camera 1930-1932、New Kokka Hand Camera 1932-1938と書かれ国産カメラ図鑑(1077番)と同じカメラの写真が

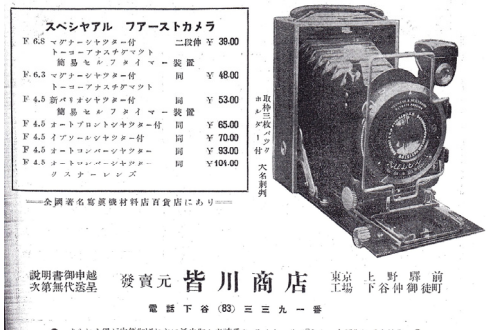


図 13　スペシャルファーストカメラ最初の広告
（アサヒカメラ昭和9年3月）

写真 5　コッカカメラ：昭和9年型
ステートアナスティグマットF4.5「マグナ」

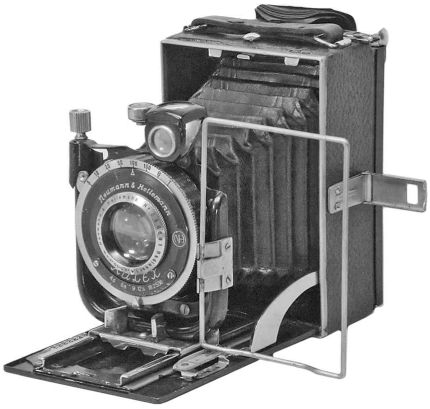


写真 6　コッカカメラ：昭和9年型
ラディオナーF4.5「ルーレックス」

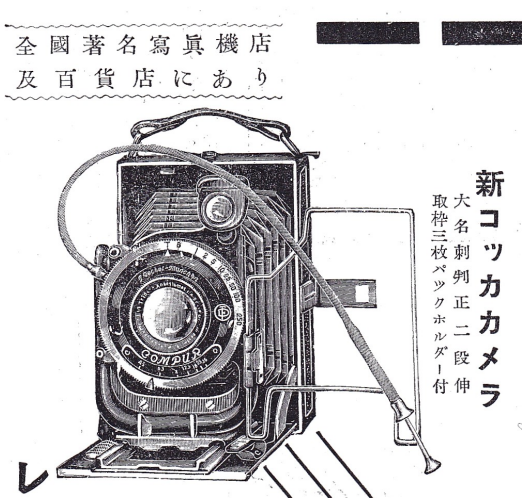


図 14 正二段伸ばしコッカカメラの広告（アサヒカメラ昭和8年3月）

図 15 改良型コッカカメラの広告（アサヒカメラ昭和9年10月）

載っている。コッカカメラが発売されたのは1933年であり、新と付けたのは前述のように新しいカメラという意味であり、旧い型に対する新型ではない。1930年に発売されたように書かれているが、そのような資料は見つからなかった。

8. メーカー名

戦前の栗林はカメラの販売にあたり栗林の名前を出していない。国産カメラ図鑑ではファーストカメラ以降、J. R. Baird氏の本でも同じくファーストカメラ以降、メーカーをFirst Camera Worksと書いている。栗林のカメラの発売元はスピードレフレックスが三栄堂本店、ミクニカメラが三栄堂本店から皆川カメラ店、ファーストカメラ以降は昭和6年まで皆川カメラ店 、昭和8年から9年まで皆川商店、一部は服部時計店写真部、昭和9年半ばからファーストカメラワークスとなっている。ファーストカメラワークスは図16に示すようにメーカーではなくそれ以前と同様に発売元であり、上野駅前と書かれていることから皆川商店と同じと思われる。その後発売元の記入はなくなり、カメラだけの広告になるとともに全国の販売店にあり、という記述になる。すなわちメーカーとしてファーストカメラワークスと書くのは間違いであり、本来の栗林にすべきである。

9. 追記：ペトリの記事

前述のように、日本写真機工業会が発行した「戦後日本カメラ発展史」におけるペトリが書いたスピードレフレックスの記事は、大きな間違いをしていることが明らかであった。ここではその後に書かれている戦前のカメラの説明を検証してみる。これは今回の主題と外れるので証拠の広告は示さないが、前述と同様の調査をした結果として述べる。そこには次のように書かれている。

「昭和初期にはテッサーレンズを装着したスプリングカメラの「イーグル」ベスト判および半裁兼用機「スピードポケット」などを次々に発表～」、「～昭和10年には戦前の一大エポックを画した記念すべきカメラ、すなわち「ファーストロール」をはじめとする「ファーストスプリングカメラ」シリーズを発売した。」

最初の文中に「昭和初期にスプリングカメラのイーグル」と出てくるが、昭和初期にスプリングカメラはなく栗林最初のスプリングカメラは昭和10年のセミファーストである。イーグルというカメラには浅沼商会から発売されたハンドカメラ（筆者も1台所有）があり、大正12年の浅沼商会のカタログに出ている。同じ名前を昭和初期に他社が使うとは思えないが、今回の調査でも昭和初期にそのようなカメラは見つけられなかった。スピードポケットは昭和11年に発売されたもので昭和初期ではない。次の文章では「記念すべきファーストロールが昭和10年に発売され、かつスプリングカメラ」であるように書かれているが、ファーストロールカメラ（当初はカメラが付いた）は昭和8年に発売されたもので、図16にあるようにレンズボードをレール上に手で引き出す所謂ベースボード型カメラであって、スプリングカメラではない。

このようにペトリが自社の歴史として書いた戦前の説明は全くのでたらめで、会社人間であった私にはとても信じられない。考証をせずに書かれたものを当時を知る者が誰もチェックしなかったのであろう。当時の技術者

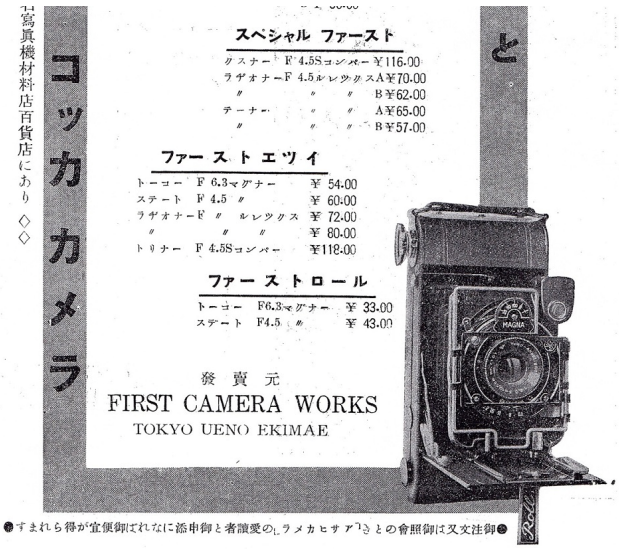


図 16 ファーストカメラワークスの広告（部分）
（アサヒカメラ昭和10年6月）

にとって苦心して世に送り出したカメラがこのような扱いを受けては泣くに泣けないであろう。しかしこの誤記の責任は重大である。会社自身が書いた歴史を後から読む人は普通疑わないからである。

10.あとがき

今回の調査をしてみて、栗林のカメラがいかに間違いだらけの説明をされているか良く分かった。発売年やカメラ名などこの調査結果を参考にしていただければ幸いである。元に戻り確認することが大事であり、安易に人の受け売りをしてはいけないということを痛烈に感じた。他の戦前の日本カメラも同様な扱いを受けているかもしれず、機会があれば調査してみたい。今回はあらゆる資料を調査できたわけではなく、誤りがあるかもしれない。気が付かれた方は是非連絡頂きたい。

参考文献
1. カメラ：大正10（1921）年4月～大正15（1926）年3月
2. アサヒカメラ：大正15（1926）年4月～昭和12（1937）年12月
3. 写真機全集：写真機全集刊行会　昭和4(1929)年
4. 大礼記念国産振興東京博覧会審査記録：昭和4（1929）年
5. 戦後日本カメラ発展史：日本写真機工業会　東興社　昭和46（1971）年
6. 国産カメラ図鑑：朝日ソノラマ　1985年初版、および1995年改訂版
7. 日本のカメラ誕生から今日まで：日本カメラ博物館、平成元（1989）年
8. Collector's Guide to Kuribayashi-Petori Cameras：J. R. Baird　1991年
9. McKeown's Price Guide to Antique & Classic Cameras 2005-2006：James M. McKeown and Joan C. McKeown
10. 今はなき昭和のカメラ：日本カメラ博物館、平成20（2008）年

なおカメラ雑誌の調査ではJCIIの図書室に大変お世話になりました、紙面を借りて深く感謝申し上げます。